いつもと同じ春

辻井喬

いつもと同じ春

辻井喬

いつもと同じ春

一九八三年五月 十五 日　初版印刷
一九八三年五月二十五日　初版発行

著者——辻井 喬
© Takashi Tsujii 1983, Printed in Japan
発行者　清水 勝
発行所　河出書房新社
東京都渋谷区千駄ヶ谷二—三二—二
電話(〇三)—四〇四—一二〇一(営業)
(〇三)—四〇四—八六一一(編集)
振替 (東京) 〇—一〇八〇二

印刷　暁印刷　製本　小高製本
定価はカバー・帯に表示してあります
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

いつもと同じ春

装画　荒川修作

装幀　菊地信義

著者撮影　立花義臣

(1983.4.14)

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

一

高い建物に囲まれたビルの屋上に旗がはためいていた。旗は暗い空間に喘いでいる偽の生物のように見えた。どこかの社章を染めぬいた緑の布切れが、せわしなく動き、周囲の澱んだ空気を掻き混ぜている。

前をオレンジ色の覆いをかけたトラックが走っていた。覆いのなかの荷物が何か分らない。私の車は高速道路を会社に向って、ほぼ同じ速度で追尾していた。積荷は重そうでも軽そうでもない。積み込み作業をしていたであろう男、輸送を命じた運送会社の係りの表情、伝票に肘を曲げて数字を書き込んでいたかもしれない女事務員の髪の形などをすっかり消して、幌を掛けられた塊りになった積載物は、私の目の前を道路のカーヴに沿って移動していた。

――それらを感じ、またその感じにもとづいて正しく公平に判断するには、いたって微妙な澄

んだ感覚が必要である。それらは幾何学におけるように、順序を追って証明することはほとんど不可能である――

パスカルの『パンセ』のなかの一節が私の心に浮んできた。

少し前から、私は『パンセ』を読んでいた。学生の頃からほぼ三十年近く経っての再読である。新しく人生の教訓を得ようとしている訳ではない。読後感をまとめて発表しようと意気込んでいるのでもない。ただ、なるべく情緒的でない作品を持続して読むことで、自分がいつも同じように生きているという安心感を得たいのだ。

パスカルが何を指して、「それらを感じ」と言ったのか正確には思い出せないが、たしか繊細な直感力を持った人と幾何学者を対比させている文脈のなかでの言葉であった。私は随分長いあいだ幾何の問題を解く明晰さを、実務を処理する際の姿勢にしたいと願ってきた。しかし、明晰さを発揮し得たと自信を持ったような場合に限って、人はことさら私の行動を誤解し、情念の屈折や歪んだ感情の影を読み取ろうとするのだ。妹の久美子が、フランスで事件を起した場合がそうだったし、それ以前にも彼女の昔の夫、林田悟郎が伯父の会社を辞めるにあたって、私の示した態度は冷たいという非難を受けた。こうした世評に対して弁解をしないことが、事態を紛糾させない唯一の方法だったとすれば、私は我慢のお蔭で、辛うじて破綻をまぬがれていただけのことなのかもしれない。

「昨日、久美子女史ハカジノ法違反容疑ニヨリ逮捕サレマシタ。支払ヲ法人名儀ノ小切手ニテ受ケタノガ原因ト思ワレマス。女史ハ、何者カノ作為ニヨルモノトノ声明ヲ出サレマシタ。法的ニハ当社ニ関係ナキ事ナガラ、社会的信用上マイナスト思ワレ、小職モ苦慮シテオリマス。ナオ、他ニ脱税容疑モアル模様」

というテレックスを、パリ駐在部長の山田正夫が打ってきたのは、一年前のことである。

彼女が三年ほど前に、フランス人の友達とカジノをはじめた時から、私が心配していた事が起ってしまったのだ。彼女は私の三歳年下の妹であり、丸和百貨店の初代パリ駐在部長でもあった。

久美子がカジノの資金作りに帰国した時、私は反対したが、決心を変えさせることが出来なかった。もともと、彼女は丸和不動産の創立者であった父、西垣浩造の性格を受け継いでいて、言い出すと相手の意見を聞き容れなかった。理屈を超えた執念が胸中に燃え盛ってしまっているようで、何が久美子をそのように熱中させたのかと訝りながら、「やるのは君の自由だが、それなら社と縁を切ってからにしてくれ」

と私は宣告した。二十数年前にフランスに渡ってから、派手な恋愛の噂が絶えなかった彼女の身辺に、今度も新しい男の影を想像しながら。

久美子は黙って私を見ていた。私の言葉が本心から出たのか、百貨店の二代目社長としての発言なのかと探っている眼付になった。彼女は私のことを文学をやりたかったのに心ならずも父親の後を継いだ男と考えていて、そのような観点から私の言動を観察するのを常とした。久美子の

瞳が、立場に忠実であろうとする私の内心の苦衷を読み取ろうとする色に染ったのを煩わしく感じて、

「駐在部長をやめて自分でカジノをはじめるのなら、それはどうしようもないが、それでも僕個人は反対だ」

と念を押した。挑みかかるような負けん気の表情が動き、すると彼女の顔は顎が張って、驚くほど父親に似てきた。

「日本はまだ文化度が低いから、カジノと言うと、眼を血走らせた貧民が群がり集まる賭博場と思うんでしょう。競輪場のイメージよね。順造兄さんもそうに違いないわ」

語調は言葉の棘を隠そうとでもするように柔らかかった。彼女が数年前から身につけた話術である。相手に理解させるのは諦めたけれども、自分の考えと立場だけは明らかにしておこうとする頑なさが、柔らかい語り口の衣裳を纏うのだ。

以前はそうではなかった。ヨーロッパに出張して久し振りに会うと、彼女はフランスと日本の違いについて饒舌になった。パリの生活で発見したことを分らせようとする気持が感じられた。熱中して早口になった。物柔らかな口調を身につけた背後に、数年前の、二人の子供との離別があるのだと思われた。その頃長女の林田八重はキリスト教に帰依してカソリック系のロンドンの病院に勤めていたし、当時中学生だった四つ年下の充郎(じゅうろう)は、父親の手でアメリカの知人に預けられていた。その後しばらく経って精神に錯乱を起した充郎は強制送還処分を受けそうになり、今

では私が日本に引取って養育している。久美子が相談できる身内と言えば、もう私と私の母親の二人だけだ。これから先、自分はひとりで生きていかなければならないと思う気持が、見えない圧力を加え続けた結果、纏わざるを得なかった幾重もの衣裳や鎧を、彼女は一気に脱ぎ捨てようとしてカジノの仕事を思い付いたのかもしれなかった。

私には、計画の失敗は目に見えるように思えたし、とすれば丸和百貨店は彼女と縁を切っておかなければならない。

「日本人がフランスでカジノをやって成功する条件は何一つないよ」そう言っても、私の主張は再三「文化の程度の違いなのよ」と斥けられた。

「それはそうかもしれない」

敗けず劣らず穏やかな、一層冷たい口調になって私は答えた。

「日本もきっとこれから大きく変るんだろう」

こんな具合に、その日の私達の会話は味気ないまま終ったのであった。

あれからまだ足かけ五年しか経っていない。久美子は最初の計画どおり、パリから百粁ほど離れた大西洋岸の田舎町に華々しくカジノを開業した。開場式の晩には、ヨーロッパの貴族は勿論のこと、アメリカの社交界からも著名な富豪や芸能人達が参加したようだ。私はハリウッドの俳優達と並んで、ミンクのコートを着て微笑んでいる久美子の写真を、後任のパリ駐在部長山田が送ってきたフランスの夕刊紙で見た。「東洋の女富豪、カジノを占領」という見出しがついてい

た。

私は久美子が求めていたのはカジノ事業ではなく、こうした華やかさだったのだと思った。眩いシャンデリアと微笑と機智に富んだ会話、追従、卓上に散るチップの響き、ロココ風に飾られた広間の雰囲気に自分を没入させ、カジノに人生の賭けをすり替えてしまいたいのだと思い、同時にそのように推測するのは、久美子が私を失意の男と見るのと同じように、彼女に対する私の思い入れなのかもしれないと考えた。しかし、宴会が終ってホテルに戻った久美子を取囲んだであろう大西洋岸の晩秋の夜の静けさを、私は自分が体験したかのように感じた。北フランスの冬は早いのである。

トラックはまだ私の前を走っていた。後方の幌が先程より少しめくれて、走行につれて起る風に烈しく震えているが、やはりなかの積荷は見えない。左手に、朝日を受けて眩しく反射する窓を持った高い建物がある。毎日、私はこのビルの横を高速道路に乗って通り過ぎるが、内部に入ったことはない。半透明のガラスが嵌っているので、昼間は各階で影のように動く人の気配がするだけだ。

霞ヶ関のトンネルを抜けると、道は高架になり、商事会社の黒い大きな建物が立ちはだかるように正面に現れる。合流地点にさしかかると、別の方角から来た道が弧を描いて近づいてくる。板橋や埼玉県南部の工場地帯に向うトラックが増えてくる。なかには丸和百貨店に商品を納入す

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

る車も混っている。

私の車は速度を落し、二つの流れはやがて一本になって、吸い込まれるように動きはじめる。高速道路は塵芥を集めて下ってゆく河みたいだ。私は塵芥の一つになって会社に向う。区政会館の表示、印刷会社の看板、紙流通センターの文字、「街に緑を」というスローガン、並んで走っている外廻り線を越して、日本酒の広告、建築設計事務所のサインが見える。この道路が出来た頃は見透しも良かったが、いつの間にか、高い建物が少しずつ高架を走る車の視野を遮るようになり、その壁に看板が掲げられ出したのだ。人間の意志とは関係のない生物が、人知れず蠢いている感じだ。

夜はたいてい会合が入っているので、帰宅は夜半に近い。自分の部屋に戻った私を待っているのは、宴会を終えた久美子が持ったのと同じ静けさである。パスカルが言うように微妙で澄んだ感覚を持つのは困難だ。社に入れば、それ以後はむしろ幾何学を解く数学者の姿勢の方が有益である。それなのに仕事に、公理や定義がないように思えるのは、まだ修練を積んでいないからだろう。

私は胸ポケットから今日の予定表を取り出した。午前中に会合が二つ、それから常務達との昼食会、午後は来客が続いて、四時からの会合には、またこの道を逆に走って丸の内界隈に出なければならない。道が混んでいれば地下鉄に乗った方がよさそうだ。予定表を見ていて、社に着いたら久美子の裁判費用をパリに送金する件で財務担当の部長と相談しなければならないのを思い

出した。社との関係を断ったと言っても、世間ではそう見てくれないし、あまり原則だけを主張して彼女が有罪にでもなれば、会社の社会的信用がマイナスになるのは、駐在部長の山田が心配するとおりだ。

私の事務所は一月ほど前に高層ビルに移転したばかりである。エレベーターを五十二階で降りて左に折れると、老人が電気掃除機の柄を押して絨緞を掃除していた。作業は毎朝八時四十五分から開始されるらしく、私の出社が五分遅れれば、彼は確実に五分間ぶんの掃除を終えていた。エレベーターホールからの間隔で作業の進み具合を測ることができる。

引越してきて初めて老人を見た時、私はある有名な作家の〝永年勤続〟という小説を思い出した。長い間、下積みの仕事を黙々と果してきた作中の主人公は、定年を間近に控えた永年勤続者表彰式の朝、突然、自分でも説明できない焦立ちと虚しさに襲われて受賞を拒否する。かつて、一度も彼を対等の人間として扱ったことのなかった人々が、老人の真面目な勤めぶりを讃える儀式に連なっているのに、主人公は耐えられなくなるのだ。彼はたった一度の、効果のない反乱を起す。

この連想は清掃の老人が身辺に漂わせている頑なな雰囲気のせいであったが、私の方に感応する部分があるからでもあった。もっとも、私の胸中に巣喰っているのは、作中の主人公の造反の心とは異る、もっと捉えどころのない不安に近いものだ。

清掃の老人は生真面目な男らしく、いつも下をむいて黙々と作業していた。私が声をかける時

だけ、お義理のように顔をあげて会釈する。年齢からすれば戦争に行っているはずだから、あるいは相当偉い軍人だったのかもしれないと私は考えたりした。

彼が老妻と二人だけの生活をしているのか、妻とも死別して一人暮しの境遇なのか、あるいは息子達の反対を押し切って、健康のためと称して、今なお自立を目指しているのかは分らない。彼が家に帰ってから持つであろう時間の侘しさ、あるいは団欒についても何も知らない。私はただ彼の傍を通って自分の部屋に到達する。老人は定められた区域の掃除を終えて帰ってしまう。ある日、彼の姿が消える。翌日から別の男が同じ場所の掃除をする。

私は日頃、会社の部下や、仕事で識り合った人の私生活について、つとめて関心を持たないようにしていた。関心を持ちはじめれば際限なく相手の身の上に絡まっていって、途中で上手に突放すことができなくなりそうだった。そういう点で、私は如才なく振舞えない自分の不器用な性格を自覚していた。父親の跡を継ぐことになった時、突放しの姿勢は私に課せられたものだ。それでも時おり、私はどうしようもない感情の起伏に捉えられる。

精神を病んでいるとしか思えない甥の林田充郎の件はその一つだ。私の家に引取ってから五年になるけれども、甥の様子はいっこうにはかばかしくなかった。時々、気に入らないことがあると暴れるようになった。もう一度、徹底した治療を受けさせた方がいいのではないかと考えている時に、久美子が逮捕されるという事件が起った。

私の部屋からは、古くなって色褪せ、所々破れた細密画を想わせる町並みが眺められた。秋だ

から空気は澄んでいて、自動車の排気ガスも立罩めていない。市街地の遙か先に、牛が数頭伏せているような秩父の連山が黒々と横たわっている。富士はそのほぼ中央にあって、もう雪を被って輝いていた。あまり整った形なので造り物のようだ。かつて、人々の信仰の対象になっていたのが不思議なくらい現実の山という感じがしない。

ぼんやり見ている私の眼に、何か煌く物が見えた。それは山までの町の厖大な拡がりの中ほどにある。おそらく郊外のアトリエか写真館の明り取りの天井が、太陽光線を反射しているのであろう。

動かずに煌いている物体とは別に、一瞬光って消えるものが見えた。町角を曲る自動車の前面ガラスの反射に違いなかった。そのガラスの後ろには、出勤する会社員とか、幼稚園に行く黄色い帽子を被った子供達が乗っているのかもしれなかった。地上に降りて歩いていれば、ごく普通に見かけることができるそうした光景も、私の部屋からは瞬く間の光の反射として伝ってくるだけだ。時間が経過し、太陽の位置が変ると、動かない物体すらも輝きを失い、反射光は届かなくなる。その頃、天窓に撥ね返された太陽光線は、五十二階を逸れて中空を走り、虚しく天空のどこかに消えてしまうのだろう。

高い処にいるのに街を支配している感じは起ってこない。逆に捕えられているように思えるのは、会社から離れられない人間になってしまっているという意識からであろう。目に見えない無数の糸で繋がれていると感じるほどの多くの年月を、私は丸和百貨店の社長として過してきた。

その間に会社は大きくなった。そうなるについて、初代のパリ駐在部長だった久美子の功績も大きかった。

その妹との関係は、彼女がカジノの計画に熱中しはじめてから壊れてしまった。

私はこれまでにも幾度か、人間が突然変る場合を経験していた。目をかけていた男が、ある日家庭の事情を理由に辞表を出し、慰留も聞かずに社を去って、一月後には競争会社の幹部になっていた場合や、快活で職場の人気者だった青年が、いつの間にか帳簿に穴をあけていたこともあった。だから慣れているつもりであったが、妹となるとやはり勝手が違った。憤りも烈しく迷いも多かった。

躊躇する担当者を督促して私は久美子を解任した。当然のことだが、彼女は私のとった処置に反撥した。そのうちに、丸和百貨店は私の自由にならないのだ、創立者の西垣浩造が死んだ後、少しずつ私の立場が弱くなったのだと考えるようになった。

「兄は私の計画を助けたいんだけど、順造兄さんに反対の勢力が強くなって動きが取れないらしいの。だから私が頑張らないといけないのよ」

と友達に洩らしたりした。彼女は子供の頃から、自分の思いつきを言葉にのせているうちに、それが事実のように思い込んでしまう性格があった。

「ああ、可哀相な順造兄さん」

と涙ぐんで語ったと言う。日本でのモダンバレーの発表会のために、久し振りに帰国した彼女

の親友、今村奈保はそう私に話して聞かせた。幻想にでも頼らなければ辛すぎる状態なのだろうと考えると、私は久美子を長くパリに置きすぎたと悔んだ。

窓の外の風景は視野から消え、太陽光線の反射ももう届かなかった。

この部屋に移ってから、よくこういう状態に陥るのに私は気づいた。気分を変えたいと思い、心を落着かせ、考えをまとめようと、私は窓際に歩いてゆく。まだ珍らしくもあるので、目を凝らして見ていると玩具のように小さな緑色の電車がのろのろと走っていたり、学校の校庭で、豆粒ほどの生徒達が整列して体操をしているのを発見したりする。やがて、心はいつの間にか懸案の問題に向っていて、何も見ていない状態に陥っている。それは幹部の人事異動だったり、新しい店の企画だったりする。それだけ、仕事に追われているとも言えるが、広い眺望を持った場所に移ったので、若い頃からの放心癖が助長されたのかもしれない。

時には、数日前に夜の盛り場で遭遇した場面や、ずっと以前に見た光景が、その場にいた人物の表情や動作などを伴って蘇ってきたりする。仕事に関連したこととは限らない。かつて女と交わした会話の一節、それを口にした時の彼女の辛そうな眼つきであったり、昔、同級生と改札口で待合せていた際、眼の前を通り過ぎた縁無し眼鏡の紳士が、駅構内に蹲っている乞食を杖で突ついていた一場面であったりする。おそらく紳士は彼が死んでいるのかどうかを好奇心に駆られてためしたのであったろう。

最初の結婚に失敗して以来、私は家庭を作っていない。その後親しくなった女も何人かいたが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com